

- ② 2020年度は（公財）武田科学振興財団による「2020年度特定研究助成」の申請を当委員会
で審査し、学内選考を経て申請者を決定した。
- (3) 発明委員会は、本学が関係する発明と特許について審議している。
- ① 2020年度の委員会は、委員長：村山雄一教授、委員：岡部教授、嘉糠教授、桑野教授、松
浦教授、横尾教授、炭山教授、加藤教授、玉利教授の各教授と谷口専務理事で構成された。
- ② 2020年度に東京慈恵会医科大学発明実施補償金取扱細則を改定し、特許権等に係る出願・
維持管理等に要した費用を控除した残金額の50%を実施補償金として支払を受ける権利を
有するものと改定した。今年度は16件の発明の届出があり、全て大学が承継した。2020年
度新たに獲得した知的財産権等は4件である。内訳は海外特許2件、国内意匠権2件である。

2) 総合医科学研究センター

昭和40年（1965）以来、着々と整備され、研究成果を挙げてきた共同利用研究施設は、平成
7年（1995）に現在の総合医科学研究センター（以下センター）に改組された。

その後、センターはいくつかの研究所の併設、新しい部ならびに施設の設立など、時代の要
求に合わせて変遷を遂げた。平成26年（2014）にセンターは本学の研究を推進するために大き
く改組された結果、混在していた様々な機能が研究支援部門と研究部、研究所の3つに明確に
分かれ、西新橋キャンパスでは大学一号館にほぼ集約された。また国領キャンパス、柏キャン
パスの教職員に研究の場を提供するため2つの研究所を有している。現在4つの研究支援施設、
10の研究部、2つの研究所よりなる。総合医科学研究センターの運用状況について、外部評価
が行われ、外部評価結果をもとに各部門が3ヵ年の到達目標を設定し目標達成に向け研究を推
進している。また、新外来棟の移設に伴い、新たにGMP/GCTP省令の製造管理および品質管
理基準の概念を準用する細胞加工施設（JIKEI-CPF）を開設した。

■支援部門

- 1) 基盤研究施設では基礎、臨床講座の教員や医師、大学院生などが登録して大型機器を使用し
たり、研究スペースを使用したりしている。また試料の微細形態観察、生化学的分析、質量
分析、ゲノム解析を中心とした受託サービスを行い、学内の研究を支援している。
- 2) 実験動物研究施設は、小型動物・中型動物の飼育・管理等に加え、9.4テスラを誇る小動物
用MRI装置、小動物用CT、高解像度エコー、発光・蛍光イメージングシステムなどを有し、
少ない動物を高い精度で解析することを可能にしている。
- 3) アイソトープ実験研究施設は引き続き学内の研究をバックアップし、かつアイソトープを用
いる研究が安全に行われるよう万全の体制で管理されており、安心して効率のよい正確な実
験を行うことができるように配慮されている。
- 4) 細胞加工施設JIKEI-CPF（旧GMP対応細胞・ベクター産生施設）は、2020年に新外来棟
6Fに新設され、GMP/GCTP省令の製造管理および品質管理基準の概念を準用する新細胞
加工施設としてリニューアルされた。当施設の最大のミッションは、産学を問わず、がんや
再生医療分野等における開発研究のGMP製造を支援することにある。一方で、保険収載さ
れたCAR-Tなどの細胞加工製品や再生医療等製品の保管・品質管理など病院機能の一部を担っ
ていくことも求められており、2021年2月にキムリアの施設認定を取得した。引き続きこれ
らのニーズに応じていくことも当施設の役割と考えている。

■研究部門

- 1) 遺伝子治療研究部では遺伝性疾患の遺伝子治療法の基礎実験を行うとともに、患者を対象と
した臨床応用を目指している。
- 2) 悪性腫瘍治療研究部はがん免疫療法の基礎ならびに臨床研究を行うとともに、CPFの運用
を通し、がん免疫細胞療法の臨床試験を支援している。また、臨床科と連携し、腫瘍の遺伝
子変異や発現解析により腫瘍変異抗原をはじめとした新たな腫瘍免疫の標的分子の探索を行っ
ている。
- 3) 分子遺伝学研究部では免疫アレルギー疾患のゲノム情報や質量解析情報等を用いて、疾患に

関連する遺伝子群、パスウェイを同定し、それらの機能解析を通して、疾患メカニズムの解明を行っており、現在、複数の臨床の診療科と共同研究を行なっている。

- 4) 医用エンジニアリング研究部は医療に用いられる次世代の工学技術を研究しており、現在はナノサイズのデバイスを用いたターゲティング画像診断・薬物治療の研究を行っている。
- 5) 神経科学研究部は、痛みと情動の連関に関与する脳内のシナプス・回路機構に対し、電気生理学・光生理学から脳機能画像までを駆使した統合的脳科学研究を推進している。本学の神経科学分野における研究と医学科・大学院教育の中心である。また、先端医学推進拠点群の第1号拠点である痛み脳科学センターの本部として痛みに対する学内横断的な研究の中核となっている。
- 6) 臨床疫学研究部では、臨床現場で働く医師の研究能力開発を目指しており、リサーチマインドを持った総合診療医の養成で重要な役割を担っている。
- 7) 分子疫学研究部は臨床疫学と分子生物学手法を融合した研究を行っている。
- 8) 再生医学研究部は神経系の外傷や変性疾患に対する新規治療法の開発を目標にした研究を行っており、霊長類疾患モデルの作成や体性幹細胞・iPS細胞などを利用した疾患の病態研究、創薬研究、臓器再建技術の開発に力を入れている。
- 9) 人工知能医学研究部は、超音波を含む画像診断における人工知能を用いた診断支援の研究などを行っていると同時に学内の人工知能研究の牽引役となっている。
- 10) 先端医療情報技術研究部は近年発展がめざましい、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を医療に用いることを目的に、ICT技術の基礎研究から臨床応用までを幅広く取り扱う研究部である。本研究部では、人々の健康管理、救急現場、病院間ネットワーク、慢性期医療としてのリハビリテーションと介護など、幅広い分野でICT医療を実践するための研究開発を行っている。

■研究所

- 1) 国領キャンパス内にある高次元医用画像工学研究所は、種々の先端医療システムを開発し、人体動作の四次元解析や医用画像に関する研究開発を行った。X線CT、MRI、超音波などの二次元、三次元、あるいは四次元画像解析を行い、医学教育、外科手術、遠隔医療などに貢献しており、第三病院外科、整形外科、形成外科と共同で、新たな手術法や画像解析手法の開発も行った。
- 2) 柏キャンパス内にある臨床医学研究所は、患者中心の医療が附属病院で実践できるよう、臨床医学研究を支援し推進することを目的に設置された。柏附属病院の多様な診療科の医師に研究の場を提供するとともに、記憶学習や情動といった「脳とこころ」の動作原理に関する研究を展開している。さらに、東京大学、東京理科大学、慶応大学、癌センターなどの近隣施設との共同研究なども積極的に推進している。また、JSTの戦略的創造研究推進事業CRESTやAMEDの革新脳プロジェクトなどの支援を得て、さらなる研究活動の発展を目指している。